

## 総合討論

中山大将

下條尚志

村橋勲

山田孝子

(司会) 王柳蘭

王 今回の発表では、「越境、あるいは民族の混淆状態の中での帰属の多様性」をとらえてきました。山田先生の最後のスライドの中にあるコメントとして、「自己再定置」が挙げられていました。人々は移動しながら戦争等もありながら、自分自身の立場を選択してきたということが各発表者の事例の中で指摘されました。そこで、自己再定置の次の展開、すなわち、ホスト社会であれ、つぎに移動した先であれ、「共同性」を人々がどうつくってきたのかということを考えてみたいと思います。コミュニティをつくりあげることができたこととか、「自己再定置」の次の展開として国境を超えたつながりが活発化したのか、あるいは国内の中で動きがあったのかという点について発表者にうかがいたいと思います。

中山さんは今回、「碑文」の分析でしたが、ご自身の調査の中で多様な先住民の碑文を解析された中で現在、「共同性」の構築が行なわれているのか、調査の中でみえてきたことがあれば、その点について、まず中山さんからのコメントをいただき

たいと思います。「自己再定置と共同性」についての補足をいただければと思います。

**中山** 山田先生、コメントをありがとうございました。今回、「故郷」という言葉を使っていましたが、少なくとも私の研究の文脈の中では日本語の「故郷」という概念自体、近代になって創られたわけです。慰霊碑なども愛国の対象として、故郷の集合体の国家を愛するという意味で使われていますが、樺太は特殊な状況があり、移住者の島でしたので樺太を「故郷」の島しようという運動が、1930年代から行なわれていて、その影響を受けた人々が戦後になって引揚げてきて慰霊碑を造ったとも言えます。樺太における「愛郷教育」「故郷教育」の影響が、慰霊碑にはあるかもしれないと考えています。社会的文脈や地域によって「故郷」「ホーム」という概念は文脈依存性、時代と地域によって、かなり違う、創られてきたものだ意識しながら考えないといけないだろうなと思っています。

質問にお答えします。「語らないことの中に書き換えとかも含まれるのではないか？」という質問です。今、目の前にある慰霊碑から「読み取れること」と「読み取れないこと」があります。今、慰霊碑そのものを見ても、たとえば「悲しみの丘」に慰霊碑を見に行っても「日本帝国主義犠牲者」としか書かれてないわけです。それを遡るために歴史研究をする必要があります。その意味で「語らないこと」と言っています。「読み換え」もそうです。「豊原へのソ連による爆撃への慰霊碑だ」と語られているものを調べている過程で、慰霊碑を建てた方に話

をうかがってみると、そうではなく、「最近そう言う人がいるけど、もともと建てた時は自分の村の慰霊碑を建てただけであって、空襲は関係ない」と言われたこともあったりしました。慰霊碑そのものを理解するためには時間幅をもって見てみないとわからないところがある、慰霊碑自体が「語らないこと」がある、それをちゃんと把握するためには「マイクロヒストリー」的な手法が必要だろうと、「小さい歴史」を見ていく必要があるだろうと思っています。

私の研究事例で、サハリンで起きているのは、建てた時は日朝住民の間のコミュニティの関係が再構築された中で建てられた行為があったにもかかわらず、今、「慰霊碑」からいろんなことを考えてしまうので、物語がバラバラに語られていて、それがぶつかるような形になっているということです。

「つながり」の話ですが、樺太引揚者の場合はバラバラに散らばって行ってしまっていて、そこでまたコミュニティをつくるという話とは違うのですが、戦後も日本人社会に帰ってくるわけですから民族的な孤独感や疎外感は、特に無いわけです。しかし一方で引揚者特有の、他の人が経験していない、自分の故郷が今は他の国のものになっているという感覚は、なかなか「内地」の人には理解されないという孤独感がある。それが引揚者同士が集まることによって埋められていくところもあるのかなと思います。そういうエネルギーが慰霊碑建立につながっていくんだろうなと思います。

**下條** 「越境」の中身について、当事者の認識ですが、他の発表

者の方と重なることがあると思いますが、そもそも「越境」という、ここで想定している「境界」は、必ずしも「国境」とは言い切れないと思います。「国境」という、わかりやすい「境界」を想定した場合、国境という概念が東南アジアに導入されたばかりの19世紀から20世紀前半までの人の「越境」移動を考えた時、人々は別に「越境」するために移動していたわけではなかったと思います。当時「境界」というのが、国境線のようにはっきりと線で区切られていたわけではなく、ぼんやりとしたグラデーションのように、徐々に世界が変わっていくという認識で人々は移動していたのだと思います。それが私のケースの場合、中国から、カンボジアから、海の世界からメコンデルタへ、という感じで人が移動していく。言語ももともと多言語的な社会なので、わりと乗り越えるのも簡単だった。それが「国境線」という概念が入ってきてから100年以上経つ現在、人々は「国境線」というはっきりした線を意識して、戦略的に「国境」を越えるようになってきたのではないかと思います。

これは「故郷」についても同じことがいえます。私の調査地の人たちの民族帰属認識はクメール人、華人とベトナム人で、その民族名はすべて「国民国家」と関連しています。具体的には、カンボジア、中国、ベトナムです。彼らが「故郷」という言葉を使う時、二つの意味合いが込められていて「出生地」であり、もう一つは「クメールだから国家としてのカンボジア」「自分のお父さんの出身地が中国だから自分のルーツは中国にある」といったものです。「故郷」という言葉にさまざまな意味が込

められていて、しばしばそれが国家であったり、自分が生まれた場所であったり、かつて自分が住んでいた場所という意味合いで「故郷」という言葉を使っていたと思います。「故郷」という言葉は私の調査地においては、近代以降につくられてきたネイション・ステートに、かなり影響されてきたのではないかと考えられます。

「自己再定置」にあたって何を「拠り所」とするかという点について、私の対象としてきた人々を考える時、難しいなと思います。山田先生から「柔軟性」とおっしゃっていただきましたが、確かに人々は紛争が起こった時、自分のアイデンティティを、時には「クメール」と名乗ったり、時には「華人」と名乗ったり、あるいは国民としての「ベトナム人だ」と名乗ったり、日本に来ているベトナム難民の人たちも、そうだと思いますが、いろいろ切り換えたりはしていると思います。ただ、彼らが置かれていた時代状況を考えると、そう言わないと弾圧される恐れがある中で仕方なく変えなければいけない、「自己再定置」しなければいけないというものがあつたのではないかと思います。必ずしも「柔軟性」だけでは説明し切れないところが、自分の調査地のことを思い浮かべながら思います。「カメレオン」のように柔軟ではありますが、時と状況によって自分の立場を変えていかなければならない時代状況があつたのではないかという気がしています。

「他者とのつながりの構築」について。自分のこれまで調べてきた経験からいって「つながり」が生まれる契機は、しばし

ば紛争直後が多いのではないかと。インドシナ戦争が起こった時、やむなく移住せざるをえなかったベンさんが、移住した先で同じく避難民だった人たちと交流を結んで、やがて結婚するとか、あるいは社会主義改造期に困窮した状況の中で、こっそり闇市に米を売りに行くために隣人と共謀するとか、そういう時に「つながり」が生まれやすいということは調査経験から感じています。つまり、国家などによって社会のなかに新たな制度を設けて「境界づけよう」とか「社会を大きく変えよう」とする大きな力が働いた時に、その直後に人々、特にその新たな制度や枠組みに自己を位置付けられない人たちが新たに「つながり」をつくりだす契機が起こってきたように思っています。そして、その関係が持続していく中で徐々に「ヒエラルキー」もできてきて、誰かが誰かを政治経済的に従属させたり、それによっていつのまにか借金づけにされた人が土地を経済力のある人にとられて出稼ぎに行かざるをえなくなってしまうということもあったのではないかと。

王 近代になって、「国境」ということで「故郷」が制度的、政策的な観点から生み出されてくる側面があるということでしょうか。そういう国家の中での越境者の位置づけに関しては、タイの中でも国籍問題においてみられます。私がパンロン人の馬さんに感動したのは彼女には国籍がない。それなのにマッカ巡礼に4回くらい行ったことです。そこに感動してしまいました。その馬さんのエネルギーはどこにあるのかというと、亡き兄に対して徳を積んで、よりよい世界を来世の中で祈念する思いで

す。パスポートはないが、手続きをすればマッカ巡礼には行くことができます。避難民のようにタイに移住してきたムスリムの人たちは、パスポートという制度的枠組みのみにしばられて生きているわけではありません。タイのパンロンの人たちが定住していく中で最も深めたのは「神への帰依」という内面的、宗教的側面です。イスラームのモスクを建てるとか宗教儀礼をやることで、さらに相互にコミュニケーションを彼ら自身が集会的にもつことで、マッカ巡礼を、国籍がないのに達成させるという思い、信仰のもつ強さがイスラームの中で深まっていく。ヒジャブを最初は被っていなかった人が多かったのですが、今、若い人たちも巡礼に行ってから被りはじめる人もいます。「共同性」を育むうえでムスリムの人たちのもつ強さというのはイスラームを軸に展開するネットワークと人々の信仰の深さが大きいかなと思っています。その後の展開はありますが、ここでは省略します。

**村橋** 難しい質問だと思いますが、越境する行為自体は昔から結構ありまして、今は越境の手続きが煩雑になって越境することを意識させられているように思います。彼ら自身が状況に応じて越境したくてするより「越境した方がよりよい生活ができる」と思うから越境するということもあります。また命の危険がある、生活が破綻する状況があるから越境するということが多かったと思います。それが比較的、容認された時代から、いろんな越境の手続きが煩雑になってきたのが今の時代です。特に、この地域は越境者に対する管理が厳しくなり、煩雑になっ

てくる。その中でいろんな手続きを彼らがぐぐり抜けていかないといけない状況が増えてきたという感じがします。

「共同性」は何を手がかりにつくるのか。簡単にいえば「ネットワーク」だと思いますが、それ以外に物質的なものも大事だろうとっていて、「慰霊碑」のようにシンボリックなものは大事な要素として出てくるだろうし、「記憶」という問題も大きくて「自分たちの記憶がどんなものであったか」を語りあうことが、私の調査するところ以外の地域でも、あるのかなと思います。彼らは基本的に、記憶を「歌」とか「踊り」の中で残していくことを絶えず、やっていくところがありまして、その意味では歴史性、時間性、記憶を、どのように継承していくかが、「自己再定置」にもかかわってくるのかなという気がしています。

何が「故郷」なのか。ナショナリズムと関係しているという話もされますが、アフリカの文脈に関していえば、ナショナリズム的な動きと直接、関連すると断言できるわけでもありません。ただ一般に言えば、南スーダンで内戦が起こる中で、民族ごとに「ホーム」という言葉は異なり自分の家を指し、集落も指し、国家自体も指します。つまり、多義的な言葉として存在しますが、東南アジアほど、ナショナリズムの運動と直接、結びついているとはいえない。緩やかに結びつけられた「ホーム」と言えますし、または、各言語において「ホーム」という言葉がさまざまな意味で使われているかなという感じがあります。「故郷」というものが自分と周辺的环境とのかかわり、どうい

うコミュニティの中で育ってきたかということの方が、自己認識の中での「故郷」という言葉に影響するかなと思います。

**王** 山田先生から一言ありましたらどうぞよろしくお願ひいたします。その後、会場とチャットからの質問を受けて質疑応答を行いたいと思います。

**山田** 簡単に一言でまとめることも難しいかと思いますが、「故郷」ということばは、中山さんがおっしゃるように「国家」、「国」との関係で出てくる場合もあれば、「国家」とは結びつかない場合もあるでしょう。自分たちが集団として存続していた場所を自分たちの「故地」として想定する行為は、いろんなところでみられると思います。たとえば、私の調査対象であったコンゴ民主共和国東部のニンドゥの人たちの事例をみると、彼らはルワンダの虐殺以降にコンゴ東部が内戦状態になってしまうなかで、村を追われて避難民生活を10年くらい続けていました。彼らは内戦状態が一応の集結をみたときに自分たちの村に戻りました。蹂躪されてしまって何もない村へ戻ったのです。そこに戻ることができた人たちは何を考えたかという、「言葉を取り戻したい」ということでした。コンゴをみていくと、民族、部族ごとに民族語（部族語）があり、そのうえに共通語があります。コンゴ東部地域ではスワヒリ語が共通語になっています。もちろん大部族であれば彼らの部族語が、かなり優勢な言語となり、消滅の危機を感じることはないでしょう。しかし、私が調査対象としたニンドゥは小部族であり、彼らは、「自分たちの言語がなくなってしまう、スワヒリ語にすっかり置き

換えられてなくなりそうだ」という危機感を覚えていました。

アフリカの人たちの伝統宗教はいわゆる民俗宗教ですが、彼らはたいいてい自分たちの慣習的な規範を「諺」とか「物語」で伝えており、部族の言語が宗教観、世界観を伝える重要な媒体となっています。このため、自分たち民族（部族）の「物語」を集めて、それらの語り伝えられてきたものを書き起こした出版物は、改めて「自分たちは何者であり、こういうものの考え方をもっている」と、「自己再定置」ができる拠り所にもなります。それにより、安心して自分たちはこういうものであるという暮らしができるといえます。

ニンドゥの人たちも村に戻って生活ができるようになったとしても、村での生活が昔のような生活にすぐ戻るわけではありません。共通の理念（観念）を共有できる状況にすることによって、「ああ、私たちは私たちなんだ」という思いをもてるといえます。それが集団としてつながっていく上で重要になるといえます。実際、ニンドゥは、村再建のための言語復興運動の取り組みのなかで、辞典を作成し、民族独自のことわざや慣用語を集めて出版する活動をしたのです。

日本国内では、コンゴのように多民族で暮らすという状況はないといえます。アフリカの国々ではたいいてい「国家」という枠組みのなかで、常に別の部族の人たちと隣接しながら暮らしています。自分の調査地をとおしての経験からも、彼らの間では、「自分たちは何者か」という意識が重要になっていたことを覚えています。「国家」ではない「小さな歴史」そのもの

ですけど、そういったものがとても大切になっています。

私たち人間は、たとえば日本人も日本国民として生きているわけではなく、何々町内の中の一人として生きているのが普通です。そういう「小さな枠組み」、日々の生活のなかでつながりあえる人たちとつながりあうことが大切なことだと思います。そういうことを今日の事例でも考えさせてくれたのではないかと考えています。

**王** ありがとうございます。「国家」ではない「小さな歴史」ということで共有するものがあるのではないかと。会場からも、それに対する質問がありました。

—— 「人々が境界を越えることにより、特定の地域とのかかわり、他者との関係を深く研究をされる中で、みなさんが考える越境者、自らが守りたいものは何かについて」。

**中山** 難しい質問ですが、私の研究事例の場合、樺太で生まれたり、子どものころに樺太に渡ったりして、そこで育ったという人生の中で、引揚げ後もそのことにこだわっていく。「自分は何者なんだろう」という「存在証明」、戦後の日本にいること自体、「なぜここにいるんだろう」という違和感がある。そういう思いが慰霊碑をつくるエネルギーになるのかなと思っています。

**下條** おそらく「国家」というのは、そんなに普段、日常的に感じるものではないと思います。これは「民族」も同じで、日常において「私は～民族」とか、人はそこまでこだわっていません。調査した地域の人々は、民族について聞かれると、たとえ

ば「自分は華人とクメール人の混血だ」と答えるけれど、普段は民族を意識していない人々が多数派だと思います。私が対象としてきた人たちの「守りたいものは何か」と考えた時、彼らのように戦争といった大きな社会変動を経験した人たちは、「故郷」という言葉で表現できるかどうかわかりませんが、「これまでやってきたものが何か大きな力によって潰されてしまうことへの違和感」、「もう一回、これまでの当たり前の日常を取り戻したい」という感情を活力にして、日々行動していたのではないかと思います。実際には、過去を取り戻すことは不可能ですが、それに近い状態に戻す、経済的にも、彼ら自身がかつて生きていた社会のあり方を理想形にして、社会が大きく変動する前に日常的にやってきたごくあたりまえのことをもう一回行いたい、こういうことかなと思いました。

王 「物語」を歴史との関係で考えてみると、パンロン人については、「自分が生きていることを認めてほしい、自分の生きてきたコミュニティが歴史の中でどういう評価を受けて、現在、どうあってほしいのか」という思いがあるのではないのでしょうか。今日のパンロン人が系譜的に自分たちのリーダーとして歴史の中でさかのぼって見出しているのは、中国の清朝期に王朝に反旗を翻した杜文秀です。同時代においては、反乱の分子としての扱いだっただと思いますが、後世になって、松本ますみ先生が研究されているのように、その再評価をする動きが出てきました。杜文秀が民族を団結するシンボルのような形で捉えられ、研究者も当事者も、いっしょに「物語」をつくりあげてい

く動きがあります。これは一つの「物語」のあり方かもしれませんが、そういう歴史との関わりの中にいまを生きるパンロン人のなかに「自分を主体としてつくりあげていきたい」という思いが、一つあるのではないかと思います。

**村橋** 私が感じているのは「家族」とか「親族」が遡れる「物語」のようなものを自分の「拠り所」としていることは、あるだろうなと思います。「記憶」を大切に、さらに「民族」とか、大きな範囲まで広がるかどうかの違いはあると思いますが。もう一つは「集落の記憶、歴史を語り継ごう」という運動も確かにあるのですが、基本的に多くの人たちが「拠り所」としている「守り続けたい」と思っているのは、「家族」や「親族」ではないかという印象を持っています。

— ではチャットからの質問です。中山先生への質問。「安らかに眠ってくださいという、あやふやな言葉が語りかけている主体は誰でしょうか。またロシアは慰霊碑を尊重、保存に協力しているのでしょうか？」。

**中山** 「安らかに眠ってください」というのは、亡くなった先住民たち、戦闘よりは、ソ連による抑留で非人道的な扱いを受けた先住民の人たちに対しての言葉です。慰霊碑は1990年代にたくさん造られましたが、今は無理な話で、あの時点で造ることができたのは、1990年代以降、ソ連崩壊前後から極東であるサハリンの社会経済状況が悪くなって、すぐ近くにある北海道や日本と交流して状況を何とかよくしたいという期待がある中で、ロシア政府の友好的な態度も相まって「慰霊碑」を建

てさせてくれたという状況があります。多分、これからは無理だと思います。ただロシアが慰霊碑を破壊するということまではいかないと思いますが、積極的に、何かをしてくれるかどうかは難しいのが現状かなと。現ロシア政府が積極的に慰霊碑を維持してくれるかという点も難しいでしょう。そうではなく、慰霊碑にかかわった地域の人々が、今でも掃除をしてきている話が聞こえてきますので、民間でつくったものは民間で維持していく、つないでいくのが、現状なのかなと思います。

— 下條さんへの質問。「民族分類の箇所ですが、1904年の統計で「métis」への注記が、1913年の統計に削除された明確な理由について。人の民族を特定する基準は何か。民族分類は自己申告制なので民族 ID にしたがるものではないでしょうか？」。

**下條** フランス植民地支配下、民族別統計については統計以上の情報が私が扱った史料には書かれていませんでした。当時統計を作成した現地の行政官がどう調べたかについての情報は、史料を見ても記載がありませんでした。ですのでちょっとわからないですが、多分、行政官が質問をして、その時の回答に「自分は華人と混ざっている（métis）」と名乗る人が多かったのではないかと推察します。あくまで現在からみた視点ですが、フータン社での調査では、確かに「混じり」とか、そうした言葉を使って自分のアイデンティティを説明する人が多かったので、植民地時代にも民族に関する質問をした時、「混じり」と答える人が多かったのではないかと。その結果、「métis」というカテゴリーを設けたのではないかと思います。あくまで推測

ですが。

—— 王先生への質問。「19世紀末にキリスト教宣教団体が雲南省において現地の少数民族に向けて活発な宣教活動を行いました。雲南省の回族のムスリムたちの間に宣教師からの影響があったのでしょうか。また越境するコミュニティについて台湾やタイにもパンロン人の人たちが潜在しているということでしたが、どのようにコミュニティを維持しているのでしょうか？」

王 1点目。雲南からタイへ来たムスリムについて、キリスト教の影響があるかということは私はよくしりませんが、清朝下でムスリムが抑圧されていた時、彼らはすでにイギリスを含めて、外の世界との交渉や商売上のネットワーク等を持っていたという指摘があります。キリスト教とは直接関係しないかもしれませんが、西洋列強とのつながりをもつことによって清朝との関係性を打開することが戦略的であったという見方をする歴史家もでてくるようです。

国境を越えてのつながり、台湾においては、ビルマから来たムスリムの人たちがいます。私の知り合いの方は今、台湾のモスクでイマームをしています。すなわち、柳さんが、ビルマでいっしょに勉強していた友だちは台湾にいて、イマーム同士がつながったコミュニティができています。ビルマでいっしょにイスラーム学校を卒業したということにつながっていますので、興味深い「つながり」が戦乱を越えて現在にあっても維持されていると思います。

—— 村橋先生への質問。「難民キャンプ制度はプラクティカル

なものです。難民キャンプができる以前との違い、何かダイナミックな人の移動が止まるとかは、していませんか?」。

**村橋** 難民キャンプをつくる理由は「人の移動を止めるため」なのです。移動する人口が多ければ大きいほど受ける国家としては何とか抑えていかないといけないという力が働く。それを支援する形で国連機関もあるということで、基本的には難民キャンプができて、そこに難民が収容されることは「人の移動が抑制される」ということです。国民国家という制度を守るために国家の側がやっていることですね。それと同時に、難民キャンプに人を集めて支援を行えば、効果的な支援ができるということもあります。こちらは、支援する国連側の言い分になるのだと思います。そのため、難民キャンプには、メリットもデメリットも当然、発生すると思います。

**王** 最後に山田先生から一言、発表者のコメントについて感想をいただきたいと思います。

**山田** 今日は、若い発表者の方々が新たな挑戦のもと、精力的に調査を続けられて得られた大変興味深い成果を発表していただいたと思っています。人類学というのは、もともと「伝統的」コミュニティでの調査が主流であったところですが、今日のご発表では、「越境」しながら生きている人たちが丁寧な調査、それぞれの環境で生きている人たちが、人の営みとして、たくましく各地で生きている現状を明らかにしていただきました。それぞれが異なる社会的、政治的条件のもとで生きるなかでも共通性もみられること、そしてこういうミクロな人々の生きざ

まは、私たち日本の社会においてつい弱腰になりそうなとき、「人間というのは力強い存在である」ことを、もう一回、振り返らせてくれるのではないかと思いました。今日はいいご発表をありがとうございました。

**王** ありがとうございました。今日にご参加くださいましたみなさま、ありがとうございました。たくさんコメントをいただきました。それらを踏まえて今後の成果や研究活動に生かしていきたいと思っていますので、どうぞよろしくお願いします。

